

西国第二十九番 青葉山

御本尊／馬頭観世音菩薩 開基／威光上人

真言宗醍醐派 松尾寺

『何ごとのおわしますかは知らねども』

かたじけなさに 涙こぼるる』

山主 松尾象空

藤末鎌初の代表的歌人の一 求めて、長旅の末に伊勢に辿

人として知られる西行法師は、 りついた西行法師。森厳な神

若き日には佐藤義清の名で華 宮の神域に足を踏み入れたと

やかな宮廷近くに仕え、道な き、姿なき大神の存在を身を

らぬ恋に浮名を流すことも 以って感じるといふ、涙が溢

あったといえます。若くして れるほどの実体験が、この歌

出家した彼は、多く旅に身を に結実したものでありましよ

置いて、僅なからぬ名歌を残 う。

しました。先に掲げた一首は、

彼が伊勢神宮を訪れて詠んだ それが神であるもよし、仏
とされる一作です。何事かを であるのもよし、「何ごと」か

を求めていた西行であればこそ、さらには、伊勢の地に至る来しかたの一步一步があつたればこそ、このような深い感懐が生まれたに相違ありません。

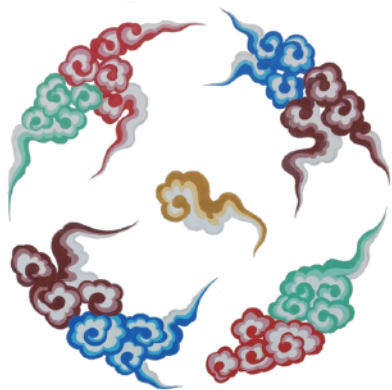
時代は移り変わり、様々な移動手段が出現するにおよんで、旅のあり様も巡礼のスタイルも、大きく変容してまいりました。我々現代人にとつて、古人の旅への思いを推し量るのは、決して容易なことではありません。それにしても、徒歩以外に移動の手段に選択の余地がなかった当時のこととはいえ、敢えて体力的にも時間的にも大きな負担となるはずの、旅へと彼を突き動かす、駆り立てていたものは何だったのでしょうか。何を求めての旅であつたので

しょうか。いまこの時代を生

きる我々が、あらためて問い直してみなければならぬことなのかも知れません。

西国の巡礼を通して、観音様との出会いは云うに及ばず、その途々にはきつと種々様々な出会いが待っていることでしょう。

皆さんの西国巡礼が素晴らしいものとなりますように！



「仏舞」所用の仏面光背に描かれる五色雲